

メタ認知を軸とした社会科の「指導－評価」モデルの開発(3)

—中学校社会科歴史的分野の場合—

金子 遥・竹田 裕貴・東 俊克

(中野区立明和中学校・京都教育大学大学院教育学研究科 修了)(東近江市立能登川中学校)(寝屋川市立中木田中学校)

Social Studies Class Development of a "Teaching-Assessment" Model Based on Metacognition (3) —Taking Social Studies Class of History as an Example—

Haruka KANEKO, Yuki TAKEDA, Toshikatsu HIGASHI

2024年9月30日受理

抄録:一連となる本研究の目的は、「主体的に学習に取り組む態度」の「①学び方に特化したものになってしまっている」「②教科依存性の低いものであり、教科の評価の中の1つの観点として見取る意義が薄い」とした課題を克服することにある。前稿及び前々稿にて、中学校社会科地理的分野でメタ認知を軸とする「指導－評価」モデルを開発・実践した。本稿では、それらの研究を発展させ、中学校社会科歴史的分野でのモデル開発を行い、生徒のメタ認知の働きによる「主体的に学習に取り組む態度」の評価の可能性を広げた。

キーワード:メタ認知、主体的に学習に取り組む態度、中学校社会科、歴史的分野、授業実践

I. はじめに

VUCAの時代にあって、学習者がどのような資質・能力を身に付けることができるかに、注目が集まっている。「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」の「論点整理(案)」の中で、「2. これからの社会像や現状の課題を踏まえた資質・能力(1) 学習指導要領における資質・能力の枠組みについて」では、「これらの資質・能力については、理解のブレが見られ資質・能力の育成の障害ともなっているため更なる整理・具体化が必要」と示され、現行学習指導要領の中でも、その資質・能力の中身のさらなる整理が必要とされている(2024年9月17日今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(第15回 資料1))。遡れば、現行学習指導要領が示される以前から、中央教育審議会答申(2016年12月21日)や「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、2019年1月21日)などにより、資質・能力の育成を目指し授業改善を図る「指導と評価の一体化」の必要性が明確化された。学習指導要領では、資質・能力の三つの柱として「知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等」に整理され、同時にそれぞれを見取る「知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度」の三つの評価の観点が示された。

そうした中で、金子遥(2021)は、メタ認知に着目し、「深い学び」の実現に繋がる社会科授業開発に取り組んできた。社会科における「深い学び」の実現には、個別の事実等に関する知識だけでなく、社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するような学習設計が求められることを示し、学習のめあてに着目した授業開発を高等学校公民科「政治経済」を例に行った。そして、金子遥・東俊克(2023)は、三つの観点で示された学習評価の中で、「主体的に学習に取り組む態度」では特に「①学び方に特化したものになってしまっている②教科依存性の低いものであり、教科の評価の中の1つの観点として見取る意義が薄い」ことを指摘し、メタ認知を取り入れた「指導－評価」モデルの開発を行った。その結果、まずは知識と技能を合わせて思考力・判断力・表現力等を発揮したことが見取れる認知系の課題を示すこと、次に認知系の課題の成果物自体を学習者がメタ認知して自己の変容や成長、人間性を認知できる課題を示すことが望まれることが分かった。換言すれば、まずは知識を駆動させた認知系の課題を示すこと、次に「認識しているものの背景や目的までも含めて認識できて

いるかを認識する」というメタ認知を働かせた非認知系の課題を示すことで、主体的に学習に取り組む態度を見取ることができる。つまり、主体的に学習に取り組む態度を見取るには、メタ認知を軸として認知系の知識と非認知系の知識を結びつけることをゴールにして、指導とそれに対応した評価を組み立てていくことが有効だと分かった。さらに、金子遥・東俊克(2024)は、モデル授業「関東地方」の授業を実践し、生徒の記述分析を手がかりにモデル授業の修正を行った。そこで、関東地方とさらにそれを包括した日本(国家像)についての2つの課題に対する生徒の記述分析を手がかりにすると、メタ認知を働かせることができ「主体的に学習に取り組む態度」の評価が可能であることを示唆された。

そこで、本研究ではメタ認知に着目し、「主体的に学習に取り組む態度」を見取る社会科の授業開発を歴史的分野で行う。この間に、第4期となる教育振興基本計画（令和5年6月16日）が閣議決定されたり、2022年2月からは次期学習指導要領の改訂に向けて、初等中等教育分科会で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会」が始まったりするなど、次期改訂に向けて方向性が示されつつある。石井英真は、2024年6月10日の「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」で、資質・能力の柱ごとに留意すべき点として、『『学びに向かう力、人間性』の理解が一樣ではないことが、授業実践や学習評価の洗練を妨げていることも考えられるため、キーワード間の関係性を整理する中で、「学びに向かう力、人間性」が指し示す意味内容（特に「主体性」の捉え方）の解像度を高めて整理し、カリキュラム全体での役割分担等を考える必要がある。」ことを指摘している。今後、「主体的に学習に取り組む態度」で見取るべき資質・能力の解像度を高める必要性に、本研究の継続を通して応えたい。

Ⅱ. メタ認知を軸とした社会科の単元

ここでは、まずメタ認知を軸とした社会科の在り方を金子遥・東俊克(2023)を基に説明する。そして、そのモデルを示す中学校社会科歴史的分野の単元について説明する。

1. メタ認知

主体的に学習に取り組む態度という観点とは、先述のようにメタ認知を含むものであり、自身の思考を認知し調整していく「メタ認知(的活動)」という側面から捉えることができる。メタ認知が行われているかどうかを指導者は見取り、自身がメタ認知を働かせているかどうかを学習者は意識化できれば、評価の信頼性・妥当性を保障することができる。三宮(2008)によれば、メタ認知は、以下のように、認知についての知識である「メタ認知的知識」と認知過程の観察やどのように学ぶかを計画する「メタ認知的活動」の二つの側面に分類できる(図1)。

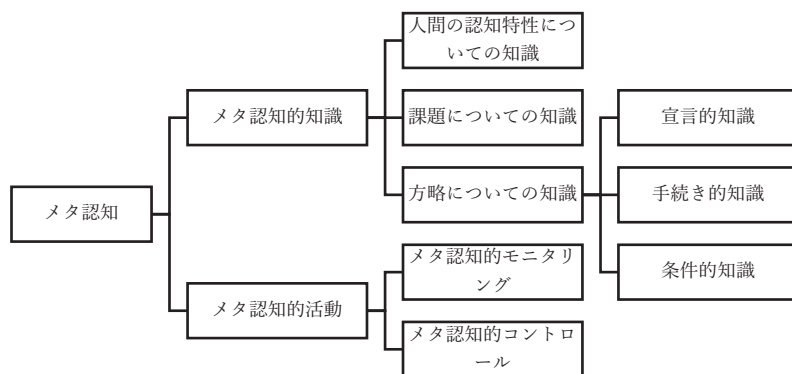


図1 メタ認知の分類(三宮, 2008)

2. メタ認知に関わる学習評価

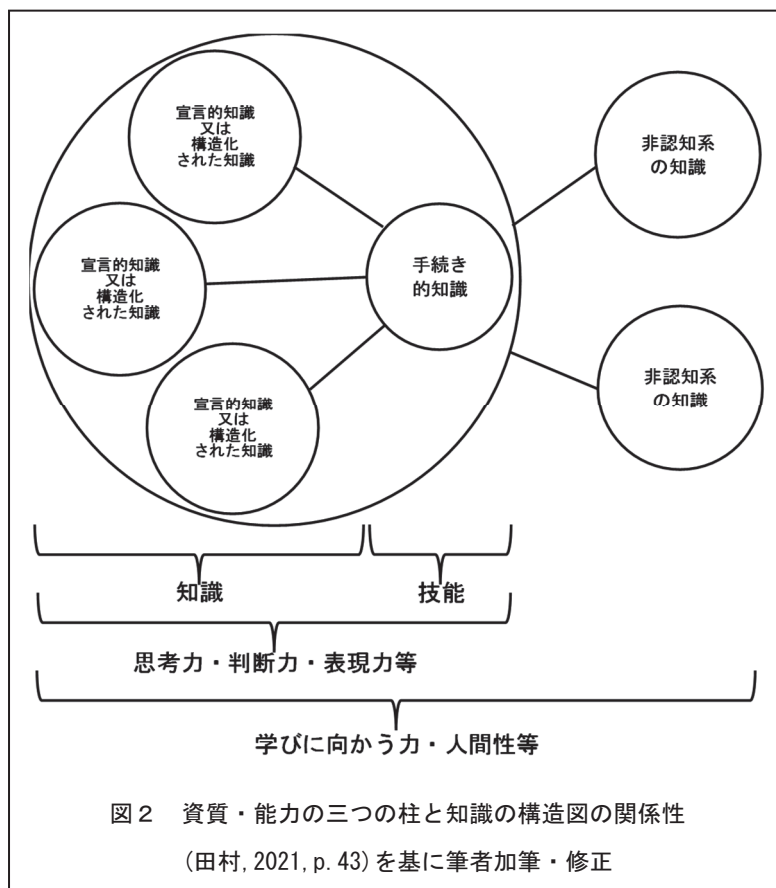
学校教育では、原田ほか(2007)や堀(2010)によってメタ認知自体の育成過程やイメージマップ・振り返りカードによる評価方法の開発が報告されている。そして、先述のように金子遥・東俊克(2023)では、メタ認知を「主体的に学習に取り組む態度」の観点として捉え、指導－評価のモデルを示した。学習活動全体を通じて行われる

メタ認知的活動、その活動を通じて身に付くメタ認知的知識の要素を持つメタ認知を軸として、「主体的に学習に取り組む態度」及び「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」を見取る「指導－評価」のモデルを開発することで、学習評価の充実を図り、カリキュラムの改善に役立てられる。

3. 認知能力と非認知能力の面から捉える学習評価とメタ認知

資質・能力の三つの柱をそれぞれ構造化した例として、田村(2021)は認知系の知識と非認知系の知識の面から述べている。ここで述べている認知系の知識と非認知系の知識は一般に「認知能力」と「非認知能力」として説明されるものと相違ないと考えられる。田村は、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等をそれぞれ入れ子構造に捉え説明している(図2)。田村の説明で特徴的なことは、「〇〇は△△である」とする一般に「知識」と言われるものをより広範に捉え、構造的に繋がったり駆動したりするものとして捉えていることである。

宣言的知識とは、事実に関する知識であり、測定しやすく言語化しやすい認知系の知識としている(p.26)。その



例に、「鎌倉幕府の最初の征夷大將軍は源頼朝である」などが挙げられる。これは、学習指導要領の中では「知識」として説明されたものである。手続きの知識とは、方法に関する知識であり、言語化できる認知系の知識としている(p.30)。その例に、「自転車の乗り方やシャツの着方」などが挙げられる。これは、学習指導要領の中では「技能」として説明されたものである。非認知系の知識については、具体的に以下の5つを例に出して説明している(p.160)。

- ①誠実性：何度も粘り強く繰り返し、ゴールや目標に向かって、計画を着実に遂行し など
- ②外向性：自ら進んで取り組む、自分の考えをはっきりと伝え、様々な人と関わり など
- ③協調性：互いのよさを生かして、それぞれの思いを摺り合わせて、相手の立場を尊重して など
- ④開放性：異なる考えを参考にして、新たなことに挑戦して、独自のアイディアを発揮して など
- ⑤安定性：いつも変わらずに、だれに対しても同じように状況に影響されることなく など

そこで、まずは知識と技能を合わせて思考力・判断力・表現力等を発揮したことが見取れる認知系の課題を示すこと、次に認知系の課題の成果物自体を学習者がメタ認知して自己の変容や成長、人間性を認知できる課題を示すことで、メタ認知を見取ることができると考えられる。換言すれば、まずは知識を駆動させた認知系の課題を示すこと、次に「認識しているものの背景や目的までも含めて認識できているかを認識する」(金子 2021, p.67.)

というメタ認知を働かせることを促す非認知系の課題を示す。こうした２段階の課題を通して、メタ認知が軸となり認知系の知識と非認知系の知識を結びつけることをゴールにして、それを見とる評価とそれに対応した指導を組み立てていく。これをメタ認知を軸とした社会科の「指導—評価」モデルとして、単元開発を行う。

4. 歴史的分野の単元

以下ではメタ認知を軸とした社会科の「指導—評価」モデルとして、中学校社会科歴史的分野の「江戸幕府の衰退」を例に単元開発を行う。本単元は、「大項目 C 近現代の日本と世界（1）近代の日本と世界」の小単元の 1 つに位置付けられる。このモデルは、単元の最初に単元末で取り組む課題(評価課題 1)を示し、ポートフォリオで習得状況を把握し修正しながら、最後に認知系の課題と非認知系の課題の 2 段階の評価課題(評価課題 2)を設定するという点に特徴がある。

Ⅲ. 「指導—評価」モデルの開発

本モデルは、金子遥・東俊克(2023)のモデル授業「関東地方」を例に、単元「江戸幕府の衰退」を作成した。そして、中学校学習指導要領第 2 章第 2 節社会の以下の項目に対応する。

大項目 C 近現代の日本と世界

- (1) 近代の日本と世界 (ア) 欧米における近代社会の成立とアジア諸国の動き
(イ) 明治維新と近代国家の形成

1. 単元名

江戸幕府の衰退

学習課題：なぜ江戸幕府は衰退したのか？—衰退に繋がった出来事や政策に着目しよう—

2. 単元の目標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
江戸時代の日本の大きな流れを、近代の世界の歴史を背景に、時代の特色を踏まえて理解するとともに、資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付ける。	近代の世界や江戸時代の日本に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察し、表現する。	近代の世界や江戸時代の日本に関わる諸事象について、そこで見られる課題を主体的に追究し、解決しようとする態度を養う。

3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①欧米諸国における産業革命や市民革命、アジア諸国の動きなどを基に、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを理解する。	①欧米諸国における産業革命や市民革命、アジア諸国の動きなどに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、欧米諸国が近代社会を成立させてアジアへ進出したことを多面的・多角的に考察し、表現している。	①近代の世界や江戸時代の日本に関わる諸事象について、見通しをもって学習に取り組もうとし、学習を振り返りながら課題を追究しようとしている。
②開国とその影響などを基に、諸資料から歴史に関する様々な情	②欧米諸国のアジア進出などに着目し、幕府が対外政策を転換し	

報を効果的に調べまとめる。	て開国したことと、その政治的及び社会的な影響を踏まえ、それが倒幕の動きを生み出したことを多面的・多角的に考察し、表現している。	
---------------	---	--

4. 単元計画

	○学習内容・活動	○指導上の留意点
1次	○単元の課題を予想し、学習への見通しをもつ。	○小学校での既習知識と関連させて考える。教科書等を活用し、単元全体の学習内容を概観する。
	単元の問い：約 260 年も続いた江戸幕府は、なぜ開国からわずか十数年で滅亡したのだろうか。	
2次	○16～17 世紀のイギリスでの絶対王政の成立を学び、国王がどのように権力を握り専制政治を行ったのかを理解する。また、イギリス革命が立憲君主政の成立に至った過程を学び、革命が議会政治をどのように変えたのかを理解する。	○絶対王政の具体的な事例を把握し、国王の権力の背景や専制の結果についても意識できるようにする。また、次時のフランス革命にも繋がるようにする。 ○イギリス革命の様々な側面を比較し、啓蒙思想の具体的な内容や影響を理解できるように、多面的・多角的に捉える。
	○絶対王政が国の運営に与えた影響を考察する。フランスでの啓蒙思想の影響を考え、社会の変革に至った背景を探る。フランス革命の進展とその影響を学び、革命が身分社会を否定し自由・平等な社会への道を開いたことを理解する。国民議会による人権宣言の意義を明確にする。	○フランス革命が持つ歴史的意義や国際的な影響を考えることが重要。人権宣言の内容を具体的に把握できるようにし、その後の影響も理解できるようにする。
	○アメリカ独立戦争の経緯を学び、独立宣言の内容から植民地の人々がイギリス本国に対して求めた権利について考察する。戦争の背景にある社会情勢や経済的要因を理解する。	○独立戦争の背景には様々な要因があるため、単一の視点ではなく、経済、社会、文化などを考慮し総合的に理解できるようにする。
	○資本主義社会における労働問題や社会問題がどのようにして社会主義運動や参政権拡大の要求を生んだのか、その背景を理解する。 ○イギリスでの産業革命の進展とその結果としての資本主義社会が成立したことを理解する。 ○機械と蒸気機関の導入が社会や経済に与えた影響を理解する。	○社会主義の歴史的背景を把握し、なぜその運動が必要とされたのかを考察できるようにする。具体的な運動や事件を事例として学ぶ。 ○産業革命がもたらした変化を広い視野で捉えることが重要。経済的、社会的な影響を具体例を用いて理解できるようにする。
	○イギリスでの産業革命を背景に、アジアへと進出していったことを理解する。 ○アヘン戦争を通じてヨーロッパがアジアへと進出し、植民地争いが始まることを地図から読み取る。	○イギリスと清との関係だけでなく、インドも含めた3カ国で捉え、ヨーロッパによるアジア進出が進んだことから日本への影響も考えられるようにする。
3次	○日本の開国の流れを学び、ペリーの来航が幕府の対外政策に与えた影響を理解する。日米修好通商条約の締結後の日本の問題を考察する。	○開国後の日本の社会変化や国際情勢との関わりを考えることが重要。具体的な事件を通じて歴史的な流れを把握できるようにする。

	○各藩や民衆からの倒幕運動を学習し、その結果幕府が倒幕に進んでいった流れを考察する。	○幕府と各藩との関係性を変化に着目して捉える。戊辰戦争など具体的な倒幕への流れを把握できるようにする。
4次	○評価課題を通して、レポートにまとめる。	○評価課題1の後、全体で共有し評価課題2に繋げる。

5. 評価課題、ルーブリック、成果物例等

1) 評価課題1

なぜ江戸幕府は衰退したのか？衰退に繋がった出来事や政策として考えられるもの2～3つ挙げて、その理由を説明しなさい。

2) 評価課題1に対するルーブリック

A	1. 歴史的事実:江戸幕府の衰退に関する具体的な出来事や政策が正確に述べられている。 2. 説明の深さ:各出来事や政策について、なぜそれが衰退に繋がったのか、具体的な説明がされている。 3. 比較・対照:他の出来事や政策と比較し、自分が選んだ出来事や政策の方が江戸幕府の衰退と繋がることを示している。
B	1. 歴史的事実:江戸幕府の衰退に関する具体的な出来事や政策が正確に述べられている。 2. 説明の深さ:各出来事や政策について、なぜそれが衰退に繋がったのか、具体的な説明がされている。
C	B基準に達していない。

3) 評価課題1の成果物例

①イギリス産業革命に着目した例

イギリスの産業革命は、技術革新と生産力の向上をもたらすなどの「近代化」を進め、経済的優位を確立しました。一方、江戸幕府は鎖国政策を続け、外国との交易を制限したため、最新の技術や情報を取り入れられず、飢饉や度重なる政治改革の失敗により経済的に成長が見られなかった。この技術的な遅れは、他の経済的な格差を生み出す要因以上に、幕府の軍事力にも影響を与え、国内外の脅威に対する防御能力を低下させました。結果として、幕府の権威が揺らぎ、衰退に繋がっていった。

②アヘン戦争に着目した例

アヘン戦争では清が敗北し、外圧の中で不平等条約を結ばざるを得なくなりました。この出来事は日本にも影響を与え、薪水給与令を出すなど幕府は弱腰な外交へと変化した。こうした外国の圧力に対する反発が高まり、藩や民衆から幕府の権威に対する疑念が倒幕運動などの形で現れた。また、藩と外国でも薩英戦争や四国連合艦隊砲撃といった接触が増え、開国後には倒幕運動が加速し、結果として、幕府の衰退が加速していった。

③開国に着目した例

江戸幕府は、ペリー来航を受けて開国を余儀なくされました。これにより、従来の鎖国政策が崩壊し外圧にさらされるようになった。幕府は不平等条約を結ぶことで、民衆に不安をもたらし、藩からの反発もあり、幕府の権威が揺らいだ。また、開国に伴い、自由貿易や西洋文化が流入し、国内の政治や経済に大きな影響を及ぼした。さらに、幕府の政治改革は失敗を重ね、民衆の不満が高まり、倒幕運動の高まりを誘発してしまったことで、結果的に衰退に繋がった。

4) 評価課題2

江戸幕府の衰退には、国外からの影響、国内の変化が大きく影響していることを学習してきました。特に、どのような出来事や政策が衰退に繋がったかを課題1では考えてもらいました。

最後に、江戸幕府の衰退についての学習を活かして、さらに大きい視点で考えましょう。それは、「**他の人が選んだ出来事や政策を例に、政権が長く続くことの条件**」を考えてください。例えば、「フランス革命」を衰退に繋がった出来事や政策に選んだ人がいれば、「権力を集中させることは、政権が長く続くことにどう影響するのか」を考えてください。そうした場合、権力を一極集中させず、多様な意見を尊重することがした方がいいこと、国民の声を聞く姿勢を持つことで政権への不満が軽減されること、国民の支持を保つことで持続的な支持を得ることが長く続く政権の条件といえるでしょう。他の人が選んだものから考えることで、自分にはなかった考えを得る機会に繋がります。

5) 評価課題2について

評価課題2は、評価課題1の認知系の課題に対して、非認知系の知識である「協調性」「開放性」などの相手の立場を尊重したり異なる考えを参考にしたりする知識を関連させることができる。例えば、イギリス産業革命では、「変化と革新」を受け入れる重要性を長く続く政権の条件と考えることができる。江戸幕府が技術革新を無視して衰退したように、常に新しい知識や技術を学び取り入れることで、柔軟な思考が競争力を高め、長く続く政権に繋がる。開国では、外部からの影響を受け入れる「グローバリズムへの耐性」を長く続く政権の条件と考えることができる。江戸幕府が「外圧に屈する」という形で不平等な条約を締結し衰退したように、新しい文化や価値観が流入する一方で、国内の不安や抵抗が生じる可能性はあるが、変化を受け入れることが国内的な経済成長を促すなどの関連を長く続く政権の条件と考えることができる。

IV. 考察

ここでは、本モデルの開発を通して明らかになったことを示す。まず、本モデルで特筆すべき点は2点ある。

1点目は、「主体的に学習に取り組む態度」の観点として、メタ認知を働かせた2段階の課題を設けている点である。「衰退に繋がった出来事や政策」という認知的な課題を最初に設定し、単元の内容から因果関係などに焦点をあて、関連させながらまとめる課題となっている。想定される生徒の解答としては、イギリス産業革命に焦点をあてて欧米諸国が台頭し勢力の拡大を進めようとする点と日本の江戸幕府衰退までの流れを関連させるもの、アヘン戦争に焦点をあてて欧米諸国がアジアへ勢力をのぼすきっかけとなった点と日本の江戸幕府衰退までの流れを関連させるもの、開国に焦点をあてて開国の影響で江戸幕府衰退と関連させるものが考えられる。そして、そうした自己の解答と他者の解答を比較し、全く逆の「政権が長く続くことの条件」といった現代とも関連する課題を設けることで、自己の解答がどの時代でも転用可能なものなのか、他者の考えより優れたものなのかといったメタ認知を働かせることができる。そして、これを見とることで「主体的に学習に取り組む態度」の評価とすることができる。

2点目は、「学びに向かう力、人間性」に対する一つの評価の在り方を提供している点である。冒頭に述べたように、「学びに向かう力、人間性」が指し示す意味内容は様ではなく、そのために授業実践や学習評価の洗練も妨げられている。本モデルでは、メタ認知を用いて認知系の知識とそれに関連する非認知系の知識を見とることで、「学びに向かう力、人間性」から「主体的に学習に取り組む態度」の中で、教科の内容に関連するもののみを評価することを提案する。これは、解像度が低い「主体的」という言葉で、何が評価に含まれるか不明瞭な「粘り強さ」「自己調整」といったものを「認知系の知識との結び付きがあるかどうか」という視点で整理し直すことに繋がる。以上、これら2点を本モデルの特筆すべき点としたい。

V. 今後の展望

本研究では、金子遥・東俊克(2023)で示した単元モデルを例に、中学校社会科歴史的分野でのモデル開発を行った。本研究のモデルを踏まえた単元開発をさらに進めるとともに、金子遥・東俊克(2024)同様、中学校社会科歴史的分野の時間で実践し学習者の成果物を実際に評価することで、評価方法の開発とその適切性を調査・改善していく必要がある。

引用・参考文献

- Charles Fadel・Maya Bialik・Bernie Trilling 著、岸学監訳、関口貴裕・細川太輔編訳(2016)『21 世紀の学習者と教育の4つの次元 知識、スキル、人間性、そしてメタ学習』北大路書房。
- Dunlosky John・Metcalf Janet 著、湯川良三・金城光・清水寛之訳(2010)『メタ認知 基礎と応用』北大路書房。
- 金子遥(2021)「メタ認知による抽象化の社会科授業開発―「日本の選挙制度」を例に―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第3号、pp.227-236。
- 金子遥・弘田真基・田中曜次(2022)「歴史的な見方・考え方を働かせる授業開発(Ⅱ)―歴史教科書の比較研究を通して―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第4号、pp.229-236。
- 金子遥・東俊克(2023)「メタ認知を軸とした社会科の「指導―評価」モデルの開発―中学校社会科「関東地方」を例に―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第5号、pp.99-108。
- 金子遥・東俊克(2024)「メタ認知を軸とした社会科の「指導―評価」モデルの開発(2)―生徒の記述分析を手がかりに―」『京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第6号、pp.131-140。
- 岡本真彦「4章 資質・能力を支えるメタ認知と深い学び」北尾倫彦ほか(2024)『「深い学び」と教え方の科学: 認知心理学による学びの深化論 (クレイス叢書 04)』図書文化社。
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校編 社会」東洋館出版社。
- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版。
- 文部科学省「第4期教育振興基本計画」令和5年6月16日閣議決定。
- 文部科学省「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(第12回)配付資料【資料2】石井委員提出資料」令和6年6月10日。
- 文部科学省「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(第15回)配付資料【資料1】論点整理(案)」令和6年9月17日。
- 三宮真智子(2008)『メタ認知―学習を支える高次認知機能―』北大路書房。
- 田村学(2021)『学習評価』東洋館出版社。
- 田中耕治編(2018)『よくわかる教育評価 第2版』ミネルヴァ書房。
- 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」2016年12月21日。
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」2019年1月21日。

付記

本稿は、金子・東が在学中から取り組んでいた研究を基に、中学校社会科歴史的分野でモデル授業を開発したものである。すべてにわたり三者で検討しているが、竹田と東がⅢを主に担当し、金子が全体の監修を行った。

本研究は JSPS 科研費 24H02415(奨励研究)「メタ認知を見取るルーブリックの開発実践研究―中学校社会科歴史的分野を例に―」の助成を受けたものです。